

石見銀山周辺における「町」を持つ村に関する基礎的研究

A Study on the Settlements with “Machi” district around the Iwami Silver Mine

原田洋一郎¹⁾

Yoichiro Harada¹⁾

Abstract: The aim of this paper is to clarify the characteristics of the settlements with the “Machi” district around the Iwami silver mine. In the eastern Iwami province, there were a lot of settlements that have the district of commerce and transportation, named “Machi” or “Ichi”. At such district, the houses of the trader or the craftsman lined both sides of the street. Such form was similar to that of the market town or the post town at that time. The “Machi” district prospered in the golden age of the Iwami silver mine in the late sixteenth century, and reduced after the decline of that mine in the late seventeenth century. At some settlement where there has been the base of powerful local clan or the production base such as foundries before the period of Civil Wars, the decline of the “Machi” was comparatively moderate. At the other settlement that grew rapidly with the development of the silver mine, the decline of it was intense.

Keywords: “Machi” district, Iwami Silver mine

1. はじめに

石見銀山の周辺には、「町」や「市」などの地名が付された集落域を持つ藩政村が分布している。それらには、しばしば銀山の盛期に繁栄したという伝承が付随する。一般に、このような集落域は非農業民の居住区として捉えられ、それらの呼称としては「在町」、「在郷町」や「地方的中心集落」などが用いられてきた^[1]。それらの術語は、城下町を中心とした大名による領国支配や領国経済の構造、あるいは農村部における商品経済の発展に関する文脈で用いられてきたように思われる。ここでは、そのような意義づけを一旦措いて、地域における具体的な実態を把握することを意図し、史料や地名の呼称に基づいて、これらを便宜的に“「町」を持つ村”と称しておく。

石見銀山は16世紀半ばより本格的に開発され、東アジアにおける交易を通して、世界史上にも大きな影響を与えた鉱山として知られている^[2]。1532(天文2)年にこの鉱山に導入されたと伝えられる鉛灰吹法は、銀の産出量を飛躍的に増加させることとなった。その技術は国内の他鉱山

へも伝えられ、16世紀末～17世紀初頭におけるわが国の金銀鉱山開発ラッシュを導き、わが国を銀の輸出国へと変貌させた^[3]。近年では、このような過程を経て、石見銀山が東アジアの交易構造に影響を与えたことが、とくに注目されるようになった^[4]。その一方で、石見銀山の開発が、周辺地域とどのように関わりつつ進められたかについては、十分に検討されてきたとはいいがたい。地域における様々な事象と鉱山の開発との因果関係を明らかにすることが必ずしも容易ではないこと、鉱山の隆盛期における周辺地域について知ることで得られる史料を得ることが困難であることなどが、このような視点からの検討を大きく制約したと思われる。

鉱山周辺の「町」を持つ村は、鉱山とその周辺地域を結びつける役割を果たしていたと考えられる。これらに注目することで、鉱山とその周辺地域との間の関係を具体的に浮かび上がらせることができると期待される。本稿では、鉱山の開発と周辺地域との対応関係のあり方について明らかにするための基礎的な作業として、地域の景観や地名、伝承などを用いて、断片的に残存する文献資料を補いつつ、

¹⁾ 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科 一般科目

銀山周辺の「町」を持つ村がどのような特徴を有していたかについて検討することとした。

2. 石見銀山の盛衰と「町」を持つ村の諸相

やや時代は下るが、「村々定引ヶ之事」という 1715(正徳 5)年の史料に、「町」と銀山との関係を示す記述がみられる^[5]。

- 一、高式石三斗九升七合 西田村
是ハ西田村町屋敷分石盛高、地下上ヶ地多罷成候ニ付御断申上、後藤覚右衛門様(1692~1698年の代官)御吟味之上、年々定引ヶニ御立被成候由申伝候
(中略)
- 一、高拾壹石式斗七升五合 久利村
内
八石式斗七升五合 久利町村分
是ハ久利村町屋敷、銀山繁昌之節村方賑敷候ニ付、高盛之町石ニ而持主相続難仕候ニ付、後藤覚右衛門様御代御断申上、御吟味之上、年々定引ニ御立被遣候由、申伝候
(中略)
- 一、高三拾四石六斗 荻原村

内

拾式石五斗式升八合 後藤覚右衛門様御代より定引式拾式石七升式合 竹田喜左衛門様御代(1716~1724年)より定引

是ハ荻原村町屋敷六拾ヶ所、往古銀山繁昌之節ハ村々より銀山へ入候銀吹炭、荻原江取集商売仕并雲州より銀山へ買込申候米其外諸色之市場ニ而夥敷賑候ニ付高盛之田石有之、其上納来候地銭も銀山衰微ニ付畑石ニ直り、町屋敷六拾ヶ所へ掛り、右町屋敷持之百姓相続難仕、村中之かつきニ罷成候ニ付、後藤覚右衛門様、竹田喜左衛門様御代、御吟味之上右之通年々定引ニ被仰付来候

この史料は、年貢の一部の減免が認められた村々について書き上げられたものである。土地条件の悪さを理由として減免が認められた例が多い中であって、これらの村では、銀山の衰退による戸口の減少などを原因として、年貢が減免されたのであった。このような村では、銀山の繁栄時には町屋敷分の年貢の石盛が高く設定されていたが、銀山の衰微に伴って町も衰退したために、村に残った村民にとって過重な負担になっていたことがわかる。

石見銀山に限らず、17世紀初頭までに開発された金銀山は、17世紀後半に至ると、鉱脈がより地下深部へと延

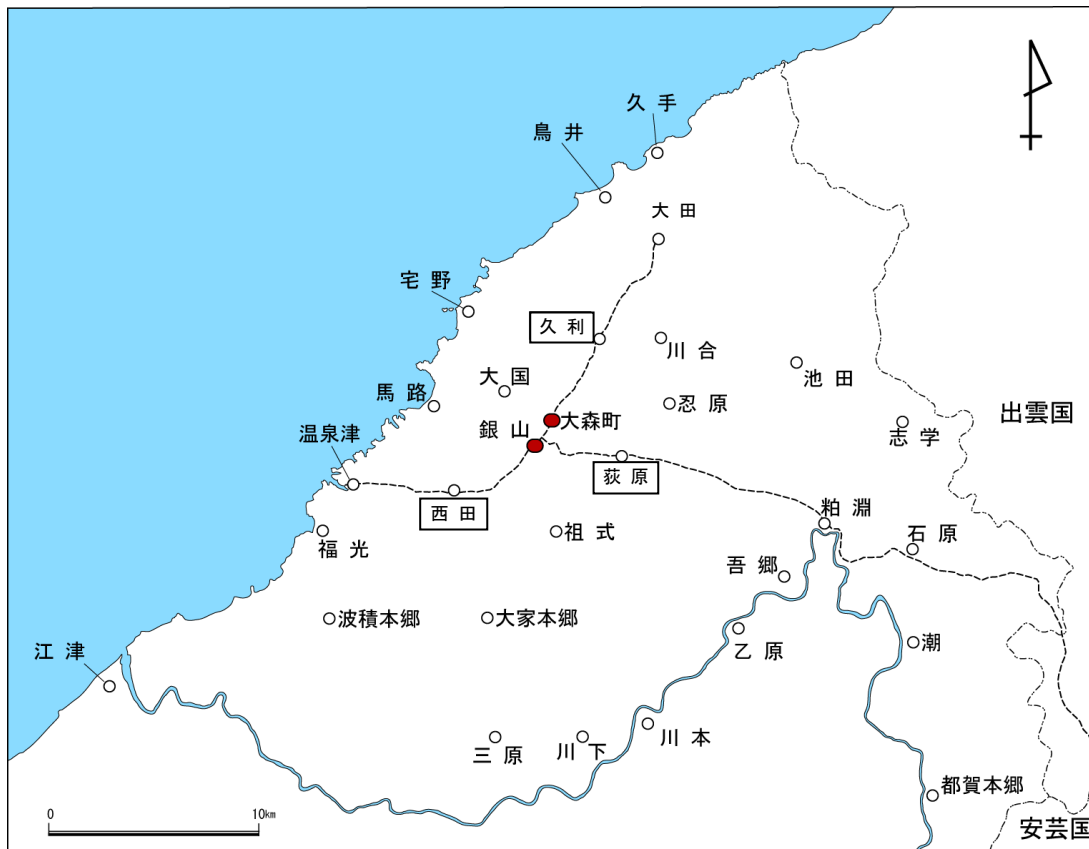


図1 石見銀山とその周辺

○ 主な集落
--- 主な道筋

びるにつれて良鉱が減少し、水没する坑道も増加したためにその産出量を減退させるようになった。その一方で、開発に必要とされる経費はますます増大するようになった。定引が実施された頃、すなわち17世紀末から18世紀初頭は、全国的にみても鉱況はまさに最悪の時期であった。この時期、幕府直轄鉱山であった石見銀山においても、幕府による経費の投入も激減していたのであった。

西田^{にした}、久利^{くり}、荻原^{おぎはら}の諸村は銀山へつながる主要な道筋上の要地に立地していた(図1)。西田村(大田市温泉津町西田)を通る街道は、銀山の外港として知られた温泉津と銀山を結んでいた。久利村(大田市久利町久利)は安濃郡の中心地であった大田町方面と銀山を結び、荻原村(大田市水上町荻原)は森林資源の豊富な邑智郡や出雲国と銀山を結ぶ道筋の要地であった。

表1は、銀山が毛利氏から徳川氏へと移管された1600(慶長5)年に作成された「子歳石見国銀山諸役銀請納書」(以下「諸役銀請納書」と記す)に記載された諸役額、及び請人についてまとめたものである^[6]。諸役額はすべて銀で示されている。ここからは、毛利氏が、銀山の開発に関わるどのような側面に注目していたかを知ることができる。

産銀に関連する役銀が群を抜いて多かったのはもちろんのことであるが、消費や運輸に関連する役銀もかなりの額にのぼったことがわかる。ここに、周辺地域から銀山への物資の輸送に関連する役銀として、「西田ヨリ銀山迄駄賃役年分」銀290枚、「佐波ヨリ銀山迄駄賃役年分」銀100枚、「大田ヨリ銀山まで駄賃役年分」銀200枚があげられている。「佐波」については、古代に安濃郡に「佐波郷」があったことなどを理由として、「佐波ヨリ銀山迄」の道筋を、仁万から大国を通して銀山へ至る道筋と推定する説もあるが^[7]、中世に至っても「佐波郷」と称されていた地区は邑智郡にあり、この郷名を氏として勢力を誇った佐波氏の根拠地でもあったことから、これは邑智郡内から銀山へ至るルート、すなわち荻原村を経由するルートと考えるのが適当ではあるまいか。この役銀の請人としては坂根五郎兵衛と貝屋四郎左衛門の名があげられている。坂根姓は大田市や邑智郡周辺にきわめて多いが、貝谷姓はこの周辺では、かつての佐波郷に含まれる粕淵、石原の両集落(ともに邑智郡美郷町)に多い姓である。このことも、この史料における「佐波」が邑智郡の佐波郷であることを裏付けていると思われる。

表1 石見銀山の役銀(1600:慶長5年)

	役の名称	額	請人
産銀に関わる役銀	間歩役	8,058枚	今井越中守 石田喜右衛門
	汲銀役・炭役	6,000枚	同上
	坂根谷二而銀ゆり場役	8枚	渡雅楽定
消費に関わる役銀	銀山本口屋	2,000枚	住吉屋三右衛門組7人衆
	石金ノ酒役	350枚	惣内加賀組7人衆
	京見世役	160枚	岡田宗喜 寺井市右衛門
	秤ノ役	130枚	田中久兵衛 三宅二郎兵衛其外組有
	温泉津京見世役	5枚	温泉津町中衆
	温泉津酒役	18枚	同上
	温泉津小浜津二而酒役	3枚	同上
	温泉津本口屋	140枚	山田宗右衛門 清水喜右衛門其外組有
運輸に関わる役銀	銀山谷中駄賃役	600枚	住吉屋三右衛門組7人衆
	中通銀山近辺駄賃場役	165枚	惣内佐平次 岡田平二
	西田ヨリ銀山迄駄賃役	290枚	中祖淡路 伊藤又右衛門其外3人
	佐波ヨリ銀山迄駄賃役	100枚	坂根五郎兵衛 貝屋四郎左衛門其外組有
	大田ヨリ銀山迄駄賃役	200枚	幸田与右衛門
その他	蔵泉寺島年貢	9枚	沼田屋善左衛門
	温泉津湯役	4枚28匁	茜屋惣兵衛
	温泉津小龍二而ノ釣役	3枚	温泉津浦中衆
	仁万浦釣役	1枚27匁	仁万浦喜兵衛
	ともがいはやまじ 両浦釣役	4枚	松浦平兵衛

(吉岡家文書 慶長5年11月「子歳石見国銀山諸役銀請納書」より作成)

注1 役銀の額はいずれも年中分の額である。

注2 銀1枚は43匁に相当する。

さて、「諸役銀請納書」には、「中通銀山近辺駄賃場役年分」もあげられ、この名目では銀165枚が課されている。「中通」については、確かなところはよくわからないが、「正保石見国絵図」に、名称に「中通」の語が付された口番所が描かれている^[8]。たとえば、「中通大森上口」「中通大国口」「中通西田口」などである。すでにみたように、西田を通過する荷には、別に駄賃役が課されている。こうしたことを理解するためには、「駄賃役」や口屋のあり方について、さらに検討が必要であるが、ここでは遠隔地から運び込まれた物資とごく近隣から運び込まれた物資の別、あるいは商品の品目によって別々に駄賃等が徴収

されたのではないかと推測しておきたい。

盛時の銀山へ運び込まれた物資の中でもっとも重要、かつ量が多かった商品は飯米であった。毛利氏の時代から幕府御料時代の初期には、北陸地方などから米が移入され、温泉津港で水揚げされていたことが知られている^[9]。発展する鉱山における需要を満たすにはそれだけでは不十分であったとみえて、前出の史料中にも記されていたように、陸路出雲方面からも米が運び込まれていた。このような主要な物資、あるいは他地域から搬入される物資については、売買の方法や諸役の徴収のあり方が、他とは異なっていたのではないだろうか。周辺の村々からは製錬用の木炭などが持ち込まれていた。「中通」口屋では、こうした御料内で生産された商品に関わる諸役が徴収されたのではないかと考える。通常であれば、所領の境界や鉱山町など特別地区の出入り口に置かれるはずの口屋が、領域の内部にこのように多数設置されていたことは、銀山の盛期には、鉱山町で必要とされる多くの物資が御料内でも盛んに生産され、運ばれていたことを物語るものと思われる^[10]。

このような事情をふまえた上で、以下では、荻原集落と西田集落を事例として、その景観や地名を手がかりに、その具体像に少しでも接近してみたい。

3. 荻原村の景観と地名

荻原集落は、かつて「荻原千軒」とも称されるほど繁栄したと伝えられる。また、この集落は、灰吹銀輸送路における最初の宿場としてよく知られている^[11]。現在の景観は、忍原川右岸の狭小な段丘面に拓かれた水田の中に数軒の家屋が点在するのみで、一見したところではその繁栄の姿をしのぶことはできない。

明治初期の地引絵図の字名を確認してみると、その時点ですでに畑や水田となっていたところも少なくなかったが、忍原川右岸の段丘上に一筋の道が通り、その両側に屋敷名の付された字名が分布していたことがわかる(図2)。それらのほとんどは奥行きに対して間口が狭い、町場に典型的な地割の特徴を示している。集落の西端部分には「口屋」の立地を示す字名がみられる。前出の「正保石見国絵図」、さらに20年以上遡る「元和石見国絵図」にも、荻原村に口屋が描かれていた^[12]。道に沿った地筆には、「紺屋敷」「米屋敷」「布屋敷」など品目、人名、地名を冠した字名が付されていた。明らかに地名と思われるものとし

ては、「亀谷屋」(大田市久利町市原)、「戸蔵屋」(大田市久利町久利)である。双方ともに銀山川の支流の谷の上流に位置しているが、「正保国絵図」には、亀谷に「亀谷口屋」、戸蔵に「筑後口屋」が描かれている。「宅の屋敷」は「宅野」(大田市仁摩町宅野)に関わりがあると思われる。また、「三谷屋」「原田屋」は苗字を示すようでもあるが、美濃郡に三谷村が、仁多郡と簸川郡に原田村があることを考えれば、あるいは地名に由来する屋号であったかもしれない。町の対岸には、「佐摩屋敷」(大田市久利町佐摩)、「地頭所屋敷」(邑智郡美郷町地頭所)と、これも近隣の地名を冠した地名が分布している。

集落の南側にはすぐに山が迫って緩い斜面となっており、屋敷が建ち並んでいた南裏にあたる斜面の部分には「伝馬」「伝馬畑」などの字名がある。この村では、江戸期を通じて、代官所の御用に応じて、御用状持や荷物持の人足が徴用されたが、この字名はこのことと関連するものと思われる^[13]。本宗寺の麓には、「目代屋敷」「郷蔵敷」の字があり、この辺りが町場の中心であったことがうかがわれる。現在、忍原川右岸の部分で家屋が分布しているのは字「布屋敷」の辺りまでであるが、明治初期の時点でもすでにほぼ同様であり、これより東側の平坦地はほとんど水田となっていた。ところが、その水田の字をみると、道の両側に「新市」を冠した字名が分布している。地引絵図や公図によれば、かつての主要道は、「新市」の下手で再び忍原川を渡って左岸へと戻るように描かれている。また、「新市道ノ上」の字の東から南西方面に山を上る道筋もあった。町の最盛時には、その辺りまで屋敷が並んでいたことが推測される。周辺の村々からもたらされた銀吹炭、出雲から移入された米などの商品は、この新市で取り引きされたものであろう^[14]。

忍原川の左岸では、景観は大きく異なっていた。川沿いの段丘面の多くは水田であり、山麓付近のやや高いところを中心に宅地が散在していた。それらを結ぶ道筋も、対岸の地区と比べると明らかに不規則な形状となっている。

「浄土寺屋敷」の字名については、浄土真宗の古刹、粕淵村の西原山浄土寺と関連するものかと思われる。粕淵村の浄土寺は、大家本郷(大田市大代町大家)や祖式村(大田市祖式町)など、中世末までの主要な町場に末寺を進出させていた^[15]。また、集落東方には「城山」などの字名があるが、これについては中世の城趾であると伝えられる^[16]。しかし、ここに拠った土豪の名は知られていない。荻原村

から北東へ向かうと、忍原村、川合村(いずれも大田市川合町)に至る。この地域は、尼子氏と毛利氏が石見銀山の領有を争った際の戦略上の要地とされ、激戦の舞台となった地でもあった。そのような関係もあって、ここに城が置かれていたものと思われる。

このように、この村には中世末までにある程度の規模の土豪が拠っていた形跡があるが、それほど有力な勢力であったとは考えられない。萩原村における「町」の発達は、やはり銀山の開発に伴う物資輸送の増大によるところが大きかったと考えられる。

4. 西田村の景観と地名

(1) 西田の町

1575(天正3)年、島津家久が京都からの帰路、銀山を経て温泉津を訪れた際の記録に「西田町」の名がみえ、すでにこの頃には西田に町場が形成されていたことがわかる^[17]。さらに、1589(天正17)年頃には毛利氏の奉行衆が置かれていたことも知られている^[18]。その具体的な位置は明らかではないが、江戸期の国絵図などから、この町に口屋の施設が設置されていたことも知られている。

「町」は、銀山方面から五老坂(降露坂)を下ってきた道が湯里川を渡る辺りよりはじまり、湯里川左岸の緩やかな坂道に沿って西方へと展開している。屋敷はやや不規則な形状ではあるが、列状に分布して町場の体裁を成している(図3)。江戸期における町の居住者の屋号をみると、「熊屋」「戎屋」「富屋」「若狭屋」などのほか、「上津井屋」(江津市松川町上津井)、「二川」(江津市波積本郷)のように、周辺の地名を示すと思われるものもあった。また、「木島屋」は温泉津町の有力な廻船商人であった木津屋中島家の別家であったとされる。「町」の部分の字名は、台帳上では、道を境として「左」「右」であるが、日常的には「上市」「中市」「下市」が通称として用いられてきたという。江戸期の地方史料にも、村内の一部の呼称として「町」「上市」「下市」の記載がみられる。

町の南側の斜面付近に「殿居山」という地字がある。「殿居山」とその西隣の字「三明」の地目はほとんどが山林であるが、字「殿居山」が「町」に接する一部には平坦地があり、土地台帳が作成された1888(明治21)年の時点では畑や水田地目となっている。「町」背後の畑の部分は、「町」よりも一段高い位置にあるが、水田地目の部分は

「町」の部分と同一面上にあり、宅地の列の間に食い込むような形になっている。町のもっとも上手からこの付近までが「上市」であったという^[19]。「中市」と「下市」を区分する際には、図3の字「寺田」と字「家ノ上」との間の小路の辺りが境とされる。集落に沿って流れる湯里川はしばしば氾濫して流路が変わっており、地籍図の地割が町成立当初のものとは異なっていたであろうことは十分に考慮する必要があるが、「上市」にあたる地区では宅地は山側の一列のみであり、宅地の形状も規則的とはとてもいいがたいものであった。これに対して、「下市」などでは道の両側に比較的規則的な形状の宅地が並んでいる。とくにもっとも下手の部分では地割はより規則的であり、その成立の事情や時期が異なっていたことをうかがわせる。

銀山から移住したと伝えられる内田家(屋号「見物」)^[20]は、西田に来た当初は「新町」に居住したとされている^[20]。ここにみられる「新町」は、屋敷の形状のもっとも整った下市の辺りを指すものであろうか。

石見地域では、中世末の土豪や在地領主の所在地が「どい」(「殿居」や「土居」の字があてられる)の地字名でよばれる例がしばしばみられる。西田の「町」との位置関係や「町」の地割をみるかぎり、字「殿居山」は、当地の土豪に何らかの関連がある場であったように思われる。中世における西田村の拠った者について知ることのできる史料は、現時点ではほとんど発見されていない。八幡宮(現在の水上社)の1548(天文17)年の棟札^[21]に、「西田甲斐守長職」の名があることが知られているのみである。

(2) 西田の郷

西田の「町」から北西に向かった辺りは、湯里川と、これに合流する支流机原川によって形成された低平な段丘面である。この場所のほとんどは水田として開発されており、その縁辺の山麓部に数戸の家屋が分布している。この付近は「郷」とよばれてきた。ここには、中世にまで遡ることができると思われる痕跡が遺されている。

水上神社(八幡宮)に隣接して「神宮寺」の字名があるが、ここは西田地内の曹洞宗清源寺の故地であったと伝えられる。清源寺は、詳細な由緒を語る史料などを伝えていないが、ほとんど檀家を持たない寺であり、古い時期の成立が推測される。

机原川の右岸にあたる南向き斜面に「鋳物屋」、左岸には「酒屋」の字名がある。石見銀山周辺では、「鋳物屋」

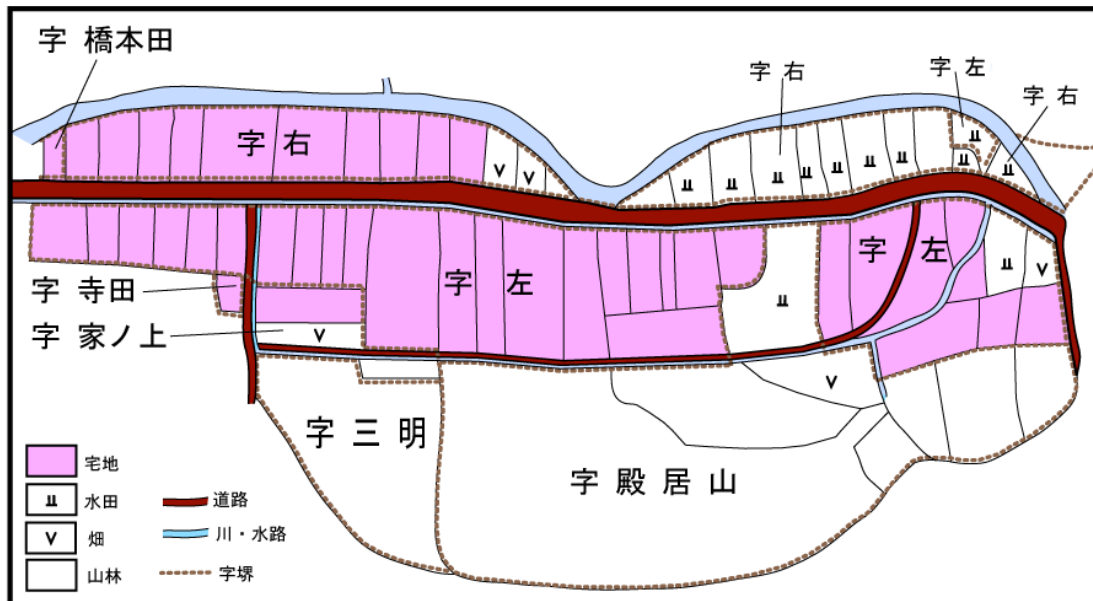
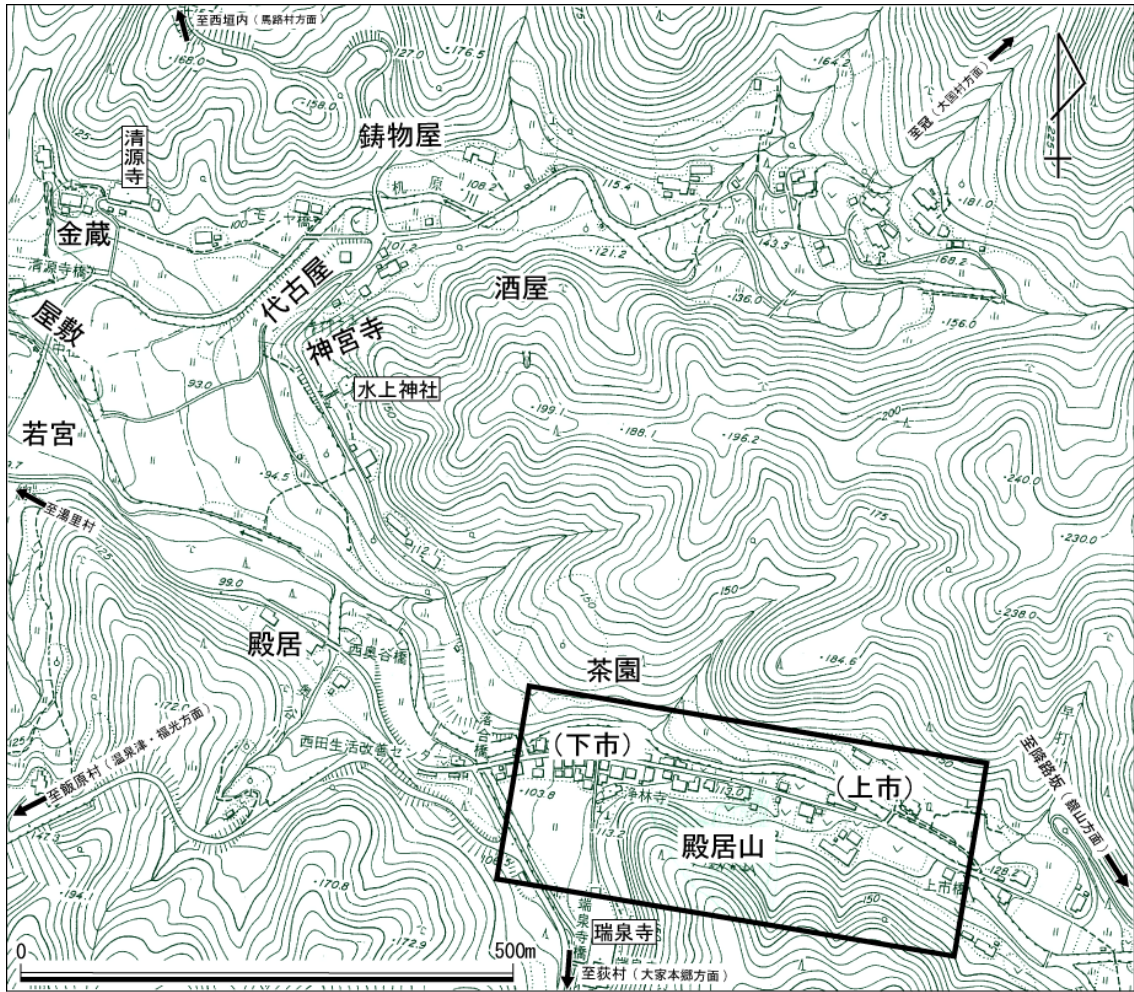


図3 西田集落の景観と地名

(上図では 5000 分の 1 都市計画図を基図として使用, 下図は旧温泉津町役場所蔵の公図を資料として作成した)

注1 地名は土地台帳に記載されている地名を基本とし, 通称地名は () 内に記した。

注2 上図中の □ の範囲は下図のおおよその範囲を示す。なお, 下図は資料の性格上, 距離, 面積等は必ずしも正確ではないため, 縮尺を示すことはできなかった。

の字名は、この他にも久利集落（大田市久利町久利）、祖式集落（大田市祖式町）、殿村（大田市温泉津町井田）などにも確認できる。いずれも緩斜面に付された字名であり、いずれも久利氏、祖式氏、石見吉川氏といった有力な在地領主の居所に近接して立地していたという共通点がある。また、久利には山邊八代姫命神社とその別当寺を前身とした福昌寺（現在は龍昌寺）、祖式には、八幡宮とその別当寺を前身とした円福寺と、それぞれ由緒のある寺社が所在していた。久利に関しては、久利家文書の中に1403（応永10）年の書写とされる「石見国久利惣領田畠目録案」^[22]の中に、すでに「いものや」の字名が確認できる。

石見銀山を取り巻くように複数の鋳物屋が立地していたことは、銀山が本格的に開発される以前に、銅の採取が行われていた可能性を想定させる。鋳物製品のもうひとつの重要な原料である鉄については、祖式で地内に鉄を産出した形跡があるのみで、他の2カ村では、鉄は産出されなかった。ということは、他所から運び込まれたと考えざるを得ない。西田についてみれば、北方の馬路村（現大田市仁摩町馬路）に鉄に関連する字地名があるほか、西方の波積本郷、南方の田窪村（現島根県邑智郡川本町田窪）や南佐木村（現川本町南佐木）などは、江戸期に盛んに砂鉄が採取された地域であり、それらのうちのいずれかの地から移入されたのではないかとと思われる。

このことに注目すれば、西田の位置は、温泉津と銀山を結ぶのみでなく、さまざまな地域と、峠を介して交流が容易な場所であったことが改めて注目される。これまでに指摘されている通り、銀山の本格的な開発を機に西田村の「町」の整備が進んだことは間違いないと思われるが、以上にみてきたことから、西田村はそれ以前からの生産の場であり、人びとや物資を集める一定の地域の中心地でもあったことがわかる。

（3）西田の住人

前にあげた「石見銀山諸役銀請納書」、および同じく慶長5（1600）年11月の「石見銀山諸役未進付立之事」^[23]には、西田から銀山間までの駄賃役年中分の請人として、中祖淡路・伊藤又右衛門・中富三郎右衛門・薄井善教・高野信五左衛門の名がみられる。このうち、中祖淡路については、温泉津と銀山を結んで運送業を営んだ者であり、温泉津町の川村市左衛門が温泉津に龍沢寺を建立した際に資金を提供するほどの資力を有していたことが知られて

いる^[24]。中祖氏の本宗家は、現在は湯里本郷にあるが、かつては西田に屋敷を構えていたと伝えられる。湯里川に机原川が合流する場所のやや上手、湯里川に架けられた橋に「中祖橋」の名がある。その周辺の「屋敷」という字名は、中祖氏に関連するものではなかったかと思われる。また、そこから机原川を少し遡った字「原ノ下」というところに中祖氏の本宗家の所有する宅地がある。その辺りは、大国村（大田市仁摩町大国）の冠集落へとつながる道の登り口にあたる。冠集落は峠を介して西田村と向き合う谷の上流部に位置し、冠川に沿ってやや下れば日本海岸の馬路村（大田市仁摩町馬路）へとつながる旧道に至り、さらに下れば大国村の上市へも至る。中祖氏は、従来考えられていたように、温泉津－西田－銀山の道筋の運送に関わったのみでなく、冠集落を経て馬路村などとの物資輸送にも関わっていたのではなかろうか。

その他の者については、確たる消息は不明であるが、薄井善教なる人物は、旧湯里町域に数軒が分布する臼井氏に関係がある可能性がある。字「鋳物師」をはじめ、その付近の土地に湯里村野田集落の臼井家の所有地がまとまってみられた。「谷川」を屋号とするこの家は臼井氏の本宗家であり、その屋敷は、西田村から野田へと向かう坂を上り、峠を越えて野田の地内に入って間もなくの場所、尾根を介してちょうど字「鋳物師」の反対側にあたる場所にあった。かつては西田村の地内に臼井本宗家の屋敷があったとも伝えられる^[25]。久利村の例からみても、「鋳物屋」地名がある場所で鋳物が生産されたのは、かなり古い時代に遡ると考えられるため、その所有地の分布のみを根拠に、薄井氏が鋳物の生産に関わる家であったと即断することはできないのであるが、前述のように、この地で鋳物を生産するにあたっては、原料の鉄や銅をはじめ、さまざまな資材を他所から移入する必要がある。前述のように、馬路村付近は砂鉄の産出地のひとつであった。西田から野田、西垣内、願城寺の集落を経て、比較的容易に馬路村へ至ることができる。臼井氏の本宗家は、西田から野田への出入り口を占め、その分家筋の家は野田方面に多いのである。そのようにみると、「諸役銀請納書」における「西田ヨリ銀山迄駄賃」に相当する項目が、「石見銀山諸役未進付立之事」では「西田大国」と記されているのは、単なる書き誤りなどではなく、実際に大国を経由する道筋の駄賃役もその中に含まれていたのではないかとすることも考えてみなければならないと思われる。

ところで、神社の補修などの際における出資額などからみると^[26]、少なくとも江戸末期の西田村では、比較的富裕な村民は、町よりもむしろ郷や周辺の谷々に分布していた。とりわけ有力であったのは熊谷家（屋号「蔵座」）と渡利家（屋号「殿居」）であった。両家の屋敷も、ともに町から離れた場所であった。熊谷家の屋敷は瑞泉寺からやや奥に入ったところにあり、渡利家の屋敷地は、図3中に「殿居」とある場所にあった。

前にもみた見物内田家の由緒の内容は、銀山の盛衰をめぐる人びとの移動のあり方の例として興味深いものである。この家の開祖惣右衛門は、1600（慶長5）年、伊勢安濃津城の攻防に宍戸備前守の配下として参戦した父が討ち死にした後、母に伴われてまず石見国高見村（島根県邑智郡瑞穂町）へ落ち着いたとされる。そこで銀山の繁栄を聞き及んで銀山の坂根谷に移住し、坂根の老^{おとな}中の娘を娶った。その後、銀山がやや衰えた際に西田に田地などを買い求め、「新町」の屋敷を普請して移住した。由緒によれば、父の33回忌法要を西田で行っているから、1630年頃にはすでに西田へ移住していたことになる。町の屋敷は長男に譲り、自身は矢瀧谷の字「二の城」付近に家屋敷田畑山林を買い求め、三男を伴って隠居した。西田への移住の際にも惣右衛門が田地や山林をも買い求めていることを、銀山の衰退を目の当たりにした住民が、自ら生産に携わり、飯米を確保することの大切さを意識したゆえのこととみるのは、推量が過ぎるであろうか。あるいは、当時、西田のような「町」では、ある程度の経済力をもった者が耕地を所有することは、むしろ当然のことであったのかもしれない。

4. おわりに

本稿で対象とした「町」を持つ村は、いずれも石見銀山に向かう街道上の要地に立地していた。「町」区域における地割の形態は、道に沿って間口の狭い短冊状の屋敷地が並ぶという、同時代の比較的整った町集落に広くみられるものであった。「町」の一角には口屋などの施設が置かれるなど、銀山開発に関わる物資の集散地としての性格が確認されたが、その成り立ちは一様ではなかった。

具体的な事例のひとつとして取り上げた西田村は、中世には有力な土豪の本拠地であり、鋳物屋という当時としては大規模な生産施設の立地する場でもあった。この村は銀山の本格的開発以前から、ある程度の範囲から人やものを

集める場であったのである。ここでは詳しく取り上げなかった久利村も同様の性質を有していた。また、その後の時代における村内の富裕者は、「町」の居住者よりも、農村部に屋敷を構えていた者の中に多く、「町」の居住者にも耕地を所有しようという指向がみられたことなどからみて、「町」における商工業が村を支持するまでには至らず、自治的な都市住民が形成されることもなかったとみられる。一方、萩原村には、景観や地名からみて、中世には有力な勢力が拠った形跡がなく、この村の「町」は、銀山の本格的開発によって急激に成長したことがうかがわれる。このことは、この「町」が、久利や西田と比較して、銀山の衰退の影響をもっとも深刻に受けたことの一因であったように思われる。

今回とりあげたごくわずかな事例のほかにも、石見銀山周辺には、町場的な特徴がみられる集落が多く分布していた。前に触れたように、元和期～正保期の国絵図に、御料内のなかほどに口番所が多数描かれていた。それらのすべてが「町」を伴っていたわけではなかろうが、口番所の存在は、ある程度の範囲の物資の集散地であったことをうかがわせる。その実態については詳細に検討してみる価値があろう。また、たとえば大家本郷のように、古くからの町場でありながら、銀山開発の影響をあまりうかがうことのできない「町」もあるなど、その成立時期、機能や銀山開発との関係性などは多様であったと考えられる。今回検討した事例についても、史料の発掘をさらに行い、銀山衰微後の「町」の展開にも注目するなど、さらなる検討を行う余地はなお少なくないが、他の集落にも目を向け、比較や相互関係の検討などを通じて、銀山を取り巻く地域全体の構造的な把握を目指したい。

付記

資史料収集にあたっては、石見銀山資料館、大田市役所、当時の温泉津町役場、島根県教育庁文化財課に数々の便宜をお図りいただきました。また、現地調査ではそれぞれの地区の住民の方々のご協力をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

本稿は、平成15年度～17年度科学研究費補助金（若手研究B）の一部を使用して実施した調査をもとに、その後考察を加えて作成したものである。

注

[1] たとえば、宮本(1968)は、日本では村の中に町があるのは、その農業国家としてのなりたちからみて当然のことであるとしている。その上で非農業者の住む集落を、城下・門前町・宿場・市民的都市・港町・在郷町・商業農家集落・漁業集落など8種類の分類を示した。小林健太郎(1985)は、町、市、浦な

どを地方的中心集落と捉え、戦国大名による領国支配の構造を構成する基礎的な要素として重視している。

- [2] 石見銀山の本格的開発の年次については、「銀山旧記」の記載に基づいて1526(大永6)年とされてきたが、小林准士(2007)は、寛永2年清水寺本堂棟札の記載によれば、1527(大永7)年とするのがより適当であるとしている。
- [3] 小葉田(1968: 4-5)。
- [4] 石見銀山の研究に関する最近の成果としては、村井(1997)、島根県教育委員会他編(1999)、石見銀山歴史文献調査団編(2002)などがあげられる。
- [5] 大田市大森町野沢家文書「正徳四年 甲午 覚」(島根県立図書館所蔵謄写本)より抜粋。
- [6] 吉岡家文書 慶長5年11月「子歳石見国銀山諸役銀請納書」。
- [7] 村上・田中・江面共編(1978: 56-57)では、「和名抄」に安濃郡「佐波郷」があることや大国の重要性などから、これを、仁万・馬路-大国-銀山を結ぶ道筋としている。
- [8] 国立国会図書館蔵。
- [9] 温泉津町中島家文書や多田家文書に、文禄期~寛永期に温泉津港に他領の米穀が水揚げされたことを示す記録がある。
- [10] 鳥屋芳雄(「国絵図の中の石見銀山・山内表現」石見銀山歴史文献調査団編2002: 144-164)によれば、元和から天保までの石見国絵図を比較してみると、口番所など役銀の徴収に関わる施設は時代を追って減少している。
- [11] 島根県教育委員会(1996: 23)。
- [12] 浜田市教育委員会蔵。萩原のほか、西田、今市原、白环、戸蔵、祖式、河下、濱原などに「口屋」が描かれている。
- [13] 大森町熊谷家文書「文久三年癸亥七月 去戌十二月より当亥七月迄御用伝馬人足賃錢書上帳」になどからその具体的な様相を知ることができる。
- [14] 石見銀山において銀吹炭は近世を通じて「吉舎炭」と称されていた。これは吹炭が、備後国の吉舎地方(広島県三次市吉舎町)で生産されたことを示していると考えられる。吉舎地方にも古くからの開発が伝えられる三玉銀山があり、製錬用の炭を製する技術が発達していたものと思われる。萩原を通過する道筋は、石見銀山と吉舎を結ぶ道でもあった。
- [15] 美里町粕淵浄土寺文書「血脈譜」による。
- [16] 水上村尋常小学校(1939):『水上村郷土誌』, 231-232。
- [17] 「中書家久公御上京日記」(島津家編輯所旧蔵本, 東大史料編纂所蔵)。ここでは、九州史料叢書刊行会編(1968)を参照した。
- [18] 石見吉川家文書 桂春房書状影写(『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書別集』所収)
- [19] 地元の古老(明治42年生まれ)への聞き取りによる。
- [20] 享保14年(天保15年写)〔内田家由緒〕(表題なし)。石見銀山資料館館長仲野義文氏より借覧。
- [21] この地域は天文初年頃まで大家氏によって領有されていたが、大家氏は1541(天文10)年に川本の小笠原氏に攻められて滅亡した(井上1990)。棟札の年号からみて、当時の西田は小笠原氏の影響下にあったと考えられること、また甲斐守の諱に小笠原氏の当主が代々名乗っている「長」の字が用いられていることから、この者は小笠原氏の一族の者であったと考えられている。
- [22] 本研究では立命館大学人文科学研究所編(1967)を参照した。
- [23] 吉岡家文書 慶長5年11月「石見銀山諸役未進付立之事」。この史料は前掲[6]の「諸役銀請納書」のうちの未進分を

まとめたものである。西田に関連する役銀は、「諸役銀請納書」には「西田ヨリ銀山迄駄賃役」とあるが、この史料では「西田大国」とある。未進分は同額であり、同じ役を指していると考えてまず誤りはないと考える。

[24] 田中圭一(2003: 73)。

[25] 臼井本宗家の居住地に関する伝承については2005年3月、西垣内の臼井家の分家への聞き取り調査による。土地台帳(明治21年作成)によれば、西田集落の字「鋳物屋」の地に臼井本宗家の所有する宅地が記載されていたが、それがこの家の元の居住地であったかは未確認である。

[26] 渡利家文書 安政2年「泰雲院殿石碑取立勘定帳」、文久2年〔八幡宮拝殿等屋根吹替入用勘定帳〕(表題なし)などによる。

文献

井上寛司(1990): 中世石見国大家荘・大家氏と都市国家, 「温泉津町誌研究」, 11-51。

石見銀山歴史文献調査団編(2002): 『石見銀山』研究論文篇, 年表・編年史料綱目篇, 思文閣出版。

江面龍雄(1979): 石見銀山と周辺農村, 地方史協議会編『山陰-地域の歴史的性格-』, 雄山閣, 221-247。

九州史料叢書刊行会編(1968): 『九州史料叢書 18 近世初頭九州紀行記集』。

小葉田 淳(1968): 『日本鉱山史の研究』, 岩波書店。

小林健太郎(1985): 『戦国城下町の研究』, 大明堂。

小林准士(2007): 安原備中間連棟札解説, 『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ 安原備中間連史料集』, 島根県教育委員会, 29-31。

島根県教育委員会(1996): 『歴史の道調査報告書 銀山街道』。

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会他編(1999): 『石見銀山遺跡総合調査報告書平成5年度~平成10年度』第1冊~第5冊, 島根県教育委員会。

田中圭一(1994): 中世金属鉱山の研究, 「歴史人類 第22号」(筑波大学歴史・人類学系), 3-58。

田中圭一(2002): 『村からみた日本史』, 筑摩書房。

田中圭一(2003): 石見銀山の脇役達, 季刊文化遺産 vol. 15, 並河萬里写真財団, 68-75。

宮本常一(1968): 『町のなりたち』, 未来社。

村井章介(1997): 『海から見た戦国日本-列島史から世界史へ』, ちくま書房。

村上 直・田中圭一, 江面龍雄共編(1978): 『江戸幕府石見銀山史料』, 雄山閣。

山根俊久(1932): 『石見銀山に関する研究』, 石東文化研究会。

温泉津町誌編さん委員会編(1995): 『温泉津町誌 中巻』, 温泉津町。

立命館大学人文科学研究所編(1967): 「石見久利家文書の研究」(立命館大学人文科学研究所紀要第16号)。